

I. 自然的・地理的環境

(1) 位置

本市は、大分県の西端、北部九州のほぼ中央の内陸部に位置する。隣接する市町村は、県内では北は中津市、東は玖珠郡玖珠町、大分県外では東は熊本県阿蘇郡小国町、南は熊本県阿蘇郡南小国町、阿蘇市、菊池市、山鹿市、西は福岡県八女市、うきは市、朝倉市、北は福岡県朝倉郡東峰村、田川郡添田町と接している。

平成17（2005）年3月22日に天瀬町・大山町・上津江村・中津江村・前津江村との合併により、東西24.9km、南北48.6km、面積666.03㎢となった。



【図 1-1 本市の位置（広域）】



【図 1-2 本市の位置（拡大）】

（２）地形

本市の地形は、周囲を阿蘇外輪山やくじゅう山系、英彦山系の山々に囲まれ、起伏に富む。北半分は典型的な盆地地形で、日田盆地と称される。現在の市街地に当たるのが日田盆地の沖積面^{ちゅうせき}で、標高は75～90mを測る。盆地内には、筑紫及び阿蘇火砕流堆積物の残丘である日隈^{ひのくま}・月隈^{つきくま}・星隈^{ほしくま}の日田三丘があり、盆地底沖積面周囲には、山田原・吹上原・葛が原・須の原^{まつの}・町野原^{まちの}・佐寺原^{さてら}・長者原^{ちやうぢやう}・陣が原^{はる}などの、「原」と呼ばれる標高150m前後の台地が段丘状に広がっている。この台地の外側には竜体山・西の山・片峰・大石峠など標高200～600mの溶岩や礫岩からなる台地が巡り、さらにその外側の市の境界域には岳滅鬼山^{がくめきさん}・大将陣山^{たいしょうじんやま}・一尺八寸山^{みおやま}・月出山岳^{かんとうだけ}といった標高700～1,000m級の山々が連なる。これらの北部から東部に連なる山々からは小野川、花月川、有田川などの河川が日田盆地に注ぎ、三隈川と合流している。



日田盆地

一方、日田盆地の南部には、釈迦岳^{しゃか}や御前岳^{ごぜん}、渡神岳^{とがみ}、酒吞童子山^{しゅてんどうじさん}など標高1,000mを超える山々が連なり、津江山系と呼ばれている。津江山系の源流から流れ出る豊富な水は、大山川^{おおやまがわ}や玖珠川^{くすがわ}などを流れて日田盆地で合流し、三隈川となり、さらに台地の合間を縫うようにして流れ出る高瀬川^{みくまがわ}、串川^{くしかわ}、内河野川^{うちがのかわ}といった小河川が合流して九州最大の河川である筑後川となる。さらに西流して大肥川が合流し筑後平野を経て有明海へと注いでいる。このように市域の水系は上津江町の楮畑川^{かごはたかわ}と山国川上流域の茸木川^{なばきがわ}を除き、すべて筑後川上流地域に位置づけられる。



三隈川と日隈山・月隈山

近世になると小ヶ瀬井路をはじめとした人工水路が築かれた。このような水利・水系は「水郷」日田の基礎となっている。

盆地内に流れ込むいくつかの小河川流域は谷底平野を形成している。盆地周辺の玖珠川や大山川の流域では、崖状の深い谷地形が形成されている。そのため、玖珠川流域では、その右岸に広がる五馬台地^{いつまだいち}を流れてきた小河川が合流点付近で滝となっている。

また、『日本書紀』や『豊後国風土記』によると、天武天皇7（678）年に筑紫国^{ちくしのかくに}で大地震が起こり、当時の日田郡でも各所に山崩れが起き、温泉が湧き出たとの記述がある。実際に桜竹や赤岩を中心とした河川敷には、単純硫黄泉の温泉源が自然湧出しており、源泉は古くから天ヶ瀬温泉の名で知られるなど、この地域特有の景観となっている。また、南部の津江地域では、昭和28（1953）年の西日本集中豪雨を契機に建設された下釜ダム^{しもうけ}をはじめとしたダム湖が多く形成されている。

御前岳の山頂や溪谷沿いにはブナ、ミズナラ、シオジなどの原生林が残っており、ここから湧き出る水は「御前岳湧水」と呼ばれ大分の名水に選ばれている。



【图 1-3 地形图】

(3) 地質

本市の地質は、市南西部の^{まえつえまちゆうぎ}前津江町柚木や北部の^{さんぐん}殿町小野川河床において、今から3億～2億7千万年前の変成岩（結晶片岩（黒色片岩）、三郡変成岩）が見られるのが最も古く、上津江町の^{ひょうど}兵戸峠や^{かわばる}川原川上流部では、中世代白亜紀（1億2千万～9千万年前）に変成岩を貫入して地上に噴出してきた岩石と考えられている花崗岩の^{ろうとう}露頭が見られる。これらの変成岩や花崗岩は、本市の基盤岩となっている。なお、本市中心部の日隈山や^{よそやま}会所山などの丘陵は、津江山地で見られる輝石安山岩からなり、日田盆地内でこの岩石が見られるのはこの2か所のみである。

北西部の^{おおひまち}大肥町白岩や南部の上津江町兵戸峠では、古第三紀始新世（4,500万～4,000万年前）に地球規模の温暖化の進行によって、大陸の一部が海に沈んだことを示す地層が見られる。北部の小野川上流域（^{もとゑ}源栄町・^{との}殿町）や^{つるがわち}鶴河内川上流域（^{つるぎ}鶴城町）では、^{やまぐにるいそう}山国累層（760万～610万年前）と名付けられ、緑灰色をした安山岩（^{あんざんがん}変朽安山岩＝プロピライト）が広く分布している。

同じく南部の中津江村^{たいお}鯛生から西部の前津江町柚木一帯にかけても暗灰色をした変朽安山岩が分布し、ここでは鯛生層群（760万～610万年前）と名付けられている。源栄町にある^{おんた}小鹿田焼（国指定重要無形文化財）の陶土原料は、後の火山活動によって高温に熱せられた地下水が上昇し、変朽安山岩を蒸したことによって陶土に適した土へと変化したと考えられている。

津江山地では火山活動が始まる前に湖が形成されており、この時の湖の跡が新第三紀系の^{ほしばる}星原層と考えられている。星原層と似たような地層は下流域の大山町にも分布している。一方、津江山地の火山活動に伴ってその地下ではマグマによる熱水作用を受け、鯛生金山のもととなる金銀鉱床が形成されていった。

小野川中流域から大肥川・鶴河内川流域周辺には、集塊岩（凝灰角礫岩や火山円礫岩、軽石凝灰岩など）で構成された^{きたさかもとるいそう}北坂本累層（610万～520万年前）と名付けられた地層が山国累層を覆うように分布している。この北坂本累層によって作られた自然景観は^{やばけい}耶馬溪と呼ばれ、本市では中津市との境にある一尺八寸山の一部が国の名勝に指定されており、^{やばひたひこさん}耶馬日田英彦山国定公園の一部としても保護されている。

西部の^{よあけ}夜明けダム付近から北部の^{あざくら}畦倉山や^{だいにちがだけ}大日ヶ岳（福岡県東峰村）、英彦山、岳滅鬼山、仏来ノ山などの山々は北坂本累層を覆うように鮮新世輝石安山岩（470万～340万年前）が広く分布している。三隈川から南部、大山川より西部の^{くろめ}釈迦岳や^{ひじ}御前岳、^{ぶく}渡神岳、酒吞童子山などの津江山地の山々は、今から360万年前から久留米～日出線より南側、大分～熊本構造線（中央構造線）より北側の範囲で大規模な隆起が起こり、その中でマグマによる火山活動が活発となって輝石安山岩を中心とした溶岩が噴出してできた。

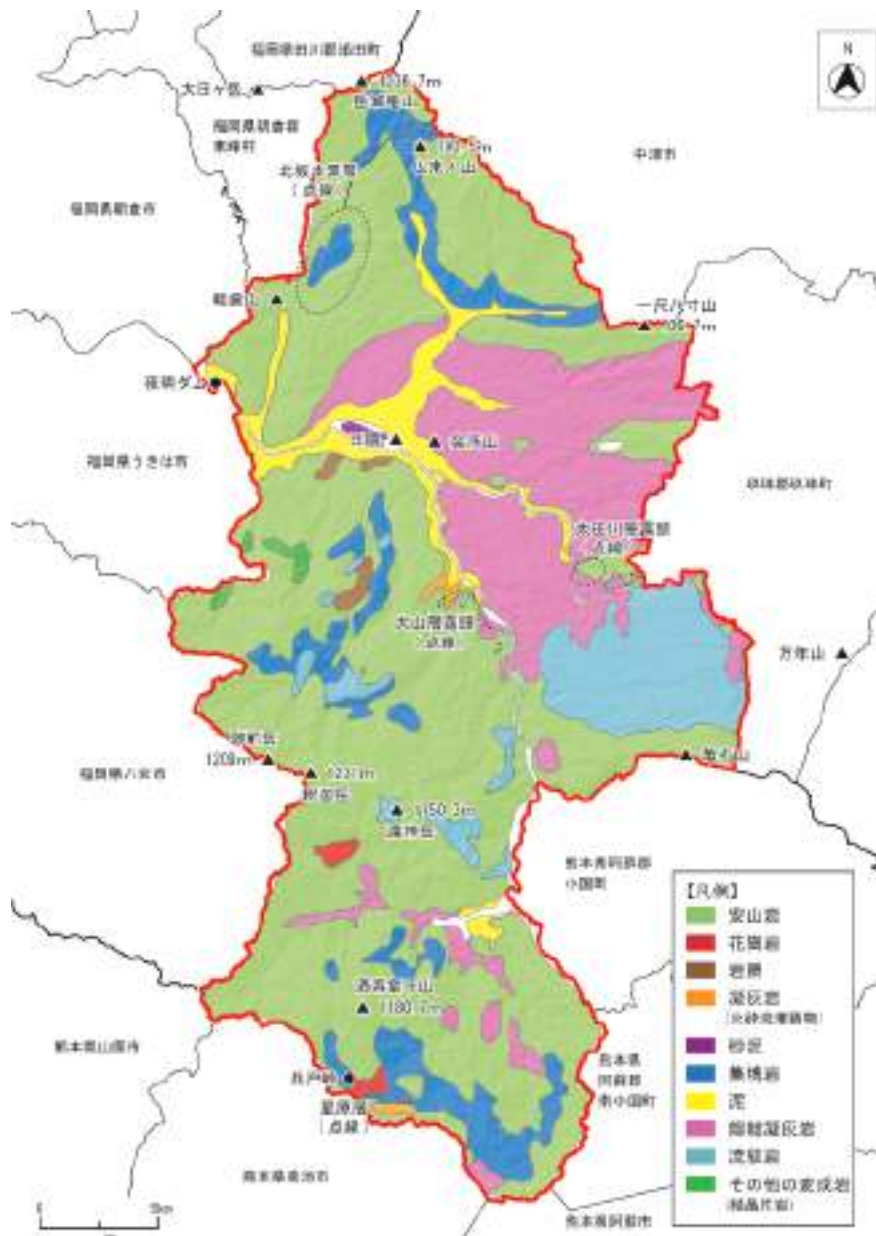
大山川より東部は五馬台地と呼ばれ、100万年前



【図 1-4 日田市周辺の地体構造図】

に玖珠盆地付近より噴出した耶馬溪火砕流堆積物に亀石山や万年山などから噴出した溶岩が覆い、平坦な台地が広がっている。この耶馬溪火砕流堆積物は日田盆地東部を中心に広く分布し、日田盆地西部の高井町川下まで及んでいる。

天瀬町の高尾川、矢瀬川沿いでは、かつて馬原地域一帯が玖珠盆地まで広がる大きな湖が形成されていたことを示す太田川層(140～120 万年前)が分布する。この地層は溶結凝灰岩の下層に堆積しており、一部露頭が見られる。この地層の中からは、珪藻・植物・魚類・貝類・哺乳類などの化石が産出する。植物の一つヒメバラモミは、現在、長野県の北アルプスなど国内で標高の高い場所にしか自生していないことを考えると、当時は今よりはるかに冷涼な気候であったことを物語る。コイ科魚類の喉頭歯化石の中には国内には生息していないダニオ亜科(ゼブラフィッシュなどの仲間)が見つかり、ワニやサイなどの足跡化石もみられることから、今は国内で生息していない動物も大陸と陸続きだった当時には日本で暮らしていたことが明らかとなった。



【図 1-5 地質図】

大山町一帯では、大山川による浸食で流れ込んだ土砂が堆積したとみられる大山層（77 万～36 万年前）が分布する。この泥岩の中からは淡水魚や二枚貝、昆虫、植物化石などが多く産出する。

太田川層と同様にサイやワニ、シカといった動物の足跡化石のほか、珪藻化石では新種のステファノディスクスヒタエンシス（和名ヒタトゲカサケイソウ）が発見された。また、メタセコイアは国内では絶滅したとされているが、この大山層が堆積した頃までは国内に自生していた。

日田盆地の周囲の台地の崖などには、凝灰岩の地層が見られる。この地層の多くは、27 万年前に火山活動を開始した阿蘇山の爆発的噴火（9 万年前）により堆積した阿蘇4 火砕流堆積物と考えられている。この中に含まれる樹木群が「小野川の阿蘇4 火砕流堆積物及び埋没樹木群」として国の天然記念物に指定されている。

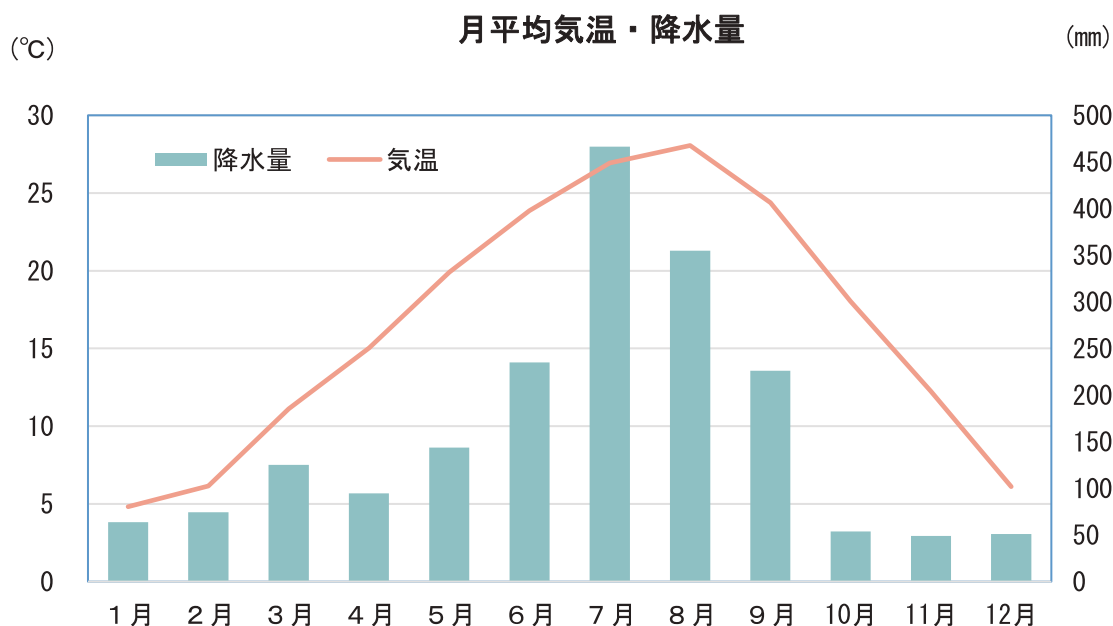
（4）気候

本市は地理的に内陸型気候で、気温の年変化や日変化が大きい。盆地周辺に中小河川が縦横に走っていることと、夜間急激に地面の温度が下がることから、秋から冬にかけて底霧^{そこぎり}の発生をみることが多い。内陸特有の性質から昼夜の気温差が大きく、また夏季は雷を伴う驟雨^{しゅうう}（にわか雨）性の降雨が発生する。風は地形の影響で西又は西北西の風が多く、風速は比較的弱い。年平均気温は 15.4℃、年間降水量は 1,810.4 mm、年平均湿度は 74.0%で比較的温暖多湿の気候といえる。



日田盆地の底霧

山間部にあたる前津江町椿ヶ鼻の降水量は 2,853 mmと、平地部と比較して多い。高い山々に雲がぶつかりそこに停滞して多くの雨を降らせる。この日田地方特有の気象は、山林地帯にスギ・ヒノキの成長を促し、全国屈指の林業地日田を作り出している。



【図 1-6 日田市の平成 30（2018）年から令和 4 年（2022）年の月平均気温・降水量（資料：気象庁）】

（５）植生・動物相

①植生

本市では、江戸時代後期からスギの植林が始まり、明治時代以降は植林面積が増加した。現在の森林面積の83%はスギ・ヒノキの人工林が占めている。また、シイタケの駒をクヌギに打ちこむ原木椎茸の生産が盛んで、天瀬町を中心にクヌギ林が目立っている。

標高の最も高い釈迦岳で1,231m、最も低い夜明関町で38mとその高低差はおよそ1,200mにも及ぶ。

大分県の植生垂直分布によれば、標高1,000mを超える所は山地帯と呼ばれ、本市では、釈迦岳や御前岳、渡神岳、酒吞童子山など標高1,000mを越える山岳が連なる津江山系には、山頂や溪谷沿いにブナ、ミズナラ、シオジなどの原生林が残っており、津江山系県立自然公園として保護されている。

なお、御前岳の北側斜面のシオジ林、ブナ林と中津江村の酒吞童子山に連なる^{へごやま}兵古山のブナ林が林野庁から「林木遺伝資源保存林」に指定されている。

標高800～1,000mの低山地帯は、アカガシ林、モミ、ツガ林が発達し、本市では、釈迦岳や御前岳、カシノキヅル谷に小面積ながら残存している。

ミヤマキリシマは本来山地帯に生息するが、亀石山（標高942m）の低山地には大群落を形成している。

標高400m以上の丘陵地では、ウラジロガシやスダジイを中心とした常緑広葉樹林が発達する。この領域はスギ、ヒノキの造林適地のため自然林は少なく、日田では^{からとまりやま}烏宿山にシイ、カシ、タブノキが優占する貴重な森林が存在する。

標高400mより低い低地では、コジイ林、アラカシ林が発達する。この森林はかつて薪炭林として利用されてきたが、ガスや電気などの普及により燃料としての需要がなくなり、その多くがスギの植林地になっている。



御前岳のシオジ原生林

②動物相

（哺乳類）

本市の自然豊かな森には、シカやイノシシ、タヌキ、テン、ムササビをはじめ、多くの野生動物が生息している。国の天然記念物のニホンヤマネは、平成21（2009）年に源栄町で初めて発見されて以降、平成30（2018）年に中津江村で1例、令和2（2020）年に前津江町で2例、令和3（2021）年に上津江町で1例発見されるなど近年発見例が相次ぎ、これまでに5例が確認されている。一方で、外来種のアライグマが津江山地をはじめ市内で多く確認されている。



ニホンヤマネ

（鳥類）

鳥類については、クマタカ（環境省絶滅危惧ⅠＢ類、大分県絶滅危惧ⅠＢ類）、オオタカ（環境省準絶滅危惧、大分県絶滅危惧Ⅱ類）、アオバズク（大分県絶滅危惧Ⅱ類）、ホオアカ（大分県準絶滅危惧）など希少な種が生息する一方、ソウシチョウ、ガビチョウなどの外来種も確認されている。

（魚類）

高低差がある本市では、標高の高い渓流域にはヤマメやタカハヤ、アカザ（環境省・大分県絶滅危惧Ⅱ類）のように低水温を好む淡水魚類が生息し、低地部では、大山川や三隈川、花月川などでオヤニラミ（環境省絶滅危惧Ⅱ類）やカワムツ、オイカワ、ムギツク、ウグイ、カワヨシノボリ、フナ、コイ、ドンコのほか、筑後川水系にのみ生息しているアリアケギバチ（環境省準絶滅危惧・大分県絶滅危惧Ⅱ類）などが生息している。

水田を潤す水路や小河川など流れが緩やかな場所では、ミナミメダカ（環境省絶滅危惧Ⅱ類）、カゼトゲタナゴ（環境省・大分県絶滅危惧ⅠＢ類）、アブラボテ（環境省準絶滅危惧種）、スナヤツメ（環境省絶滅危惧Ⅱ類・大分県絶滅危惧ⅠＢ類）やアリアケスジシマドジョウ（環境省絶滅危惧ⅠＢ類、大分県絶滅危惧ⅠＢ類、大分県指定希少野生動植物）が生息している。

かつて市内に数多く生息していたニッポンバラタナゴ（環境省絶滅危惧ⅠＡ類）やカネヒラなどは近年見られなくなった。

（昆虫類）

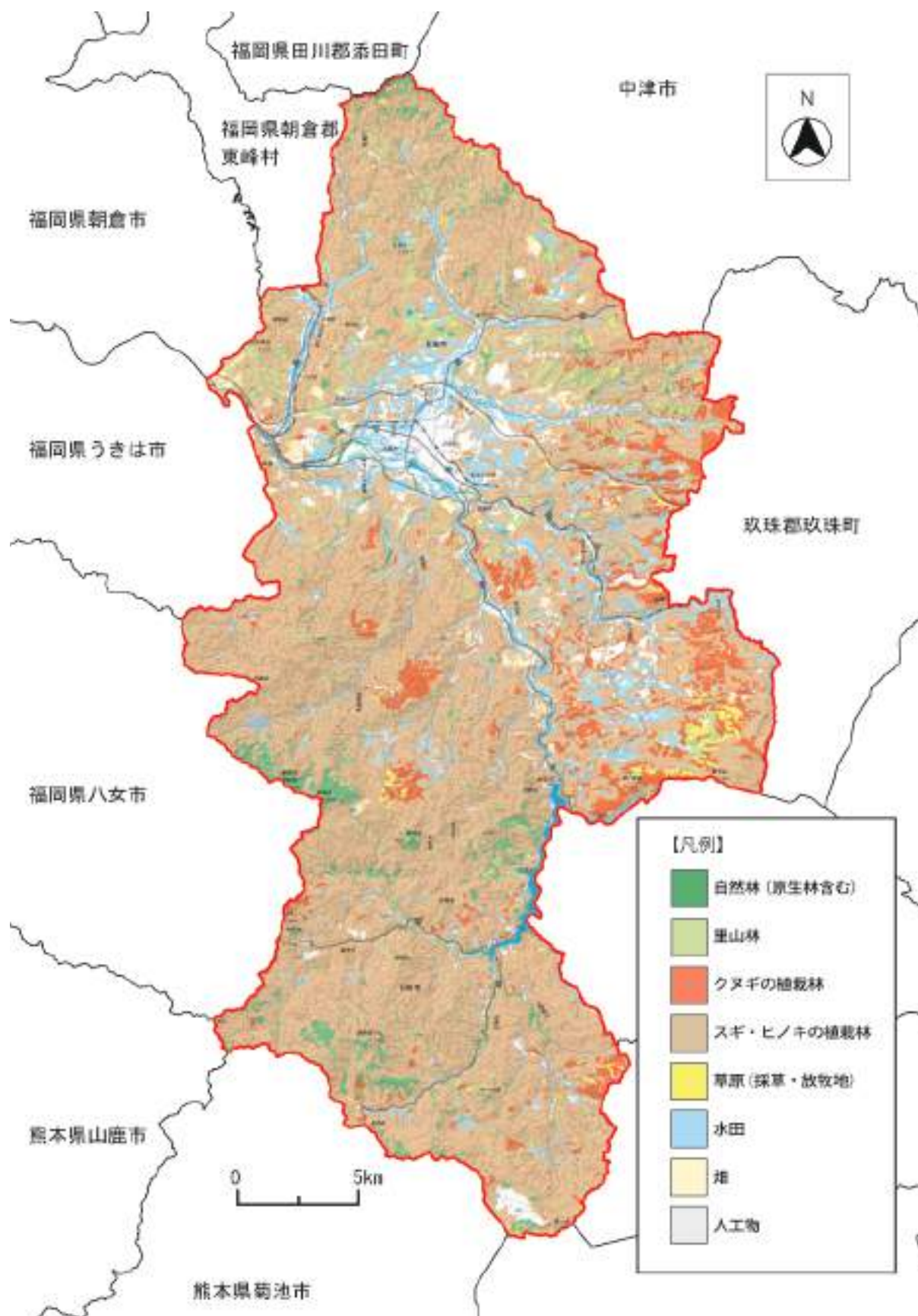
川の多い本市では水生昆虫も数多く生息しているが、最も一般的に知られている水生昆虫がホタルである。市内で見られるホタルの種類は、ゲンジボタル、ヘイケボタル、ヒメボタル、オオマドボタルであるが、近年その数が激減してきており、市民の間で幼虫時代を水の中で過ごすホタルを増やす努力が続けられている。また、かつて水田にたくさん見ることができたタガメやゲンゴロウは、近年発見例がない。

（両生類・爬虫類・その他）

両生類のブチサンショウウオ（環境省・大分県準絶滅危惧）や県内では日田市でのみ確認されているカスミサンショウウオ（環境省絶滅危惧Ⅱ類、大分県絶滅危惧ⅠＢ類、大分県指定希少野生動植物）も見られる。

また、市内では昔から水田や水路で見られていた爬虫類のニホンイシガメ（環境省準絶滅危惧）の発見例も少なくなってきたり、保護が必要である。

水路や小河川には、カワニナやシジミ、カラスガイやイシガイ、マツカサガイなどの貝類も生息している。特に淡水二枚貝類はかつて市内の小河川や水路で多く見ることができたが、近年は豆田町を流れる水路にカろうじて見ることが出来る程度に激減している。



【図 1-7 植生図】

2. 社会的環境

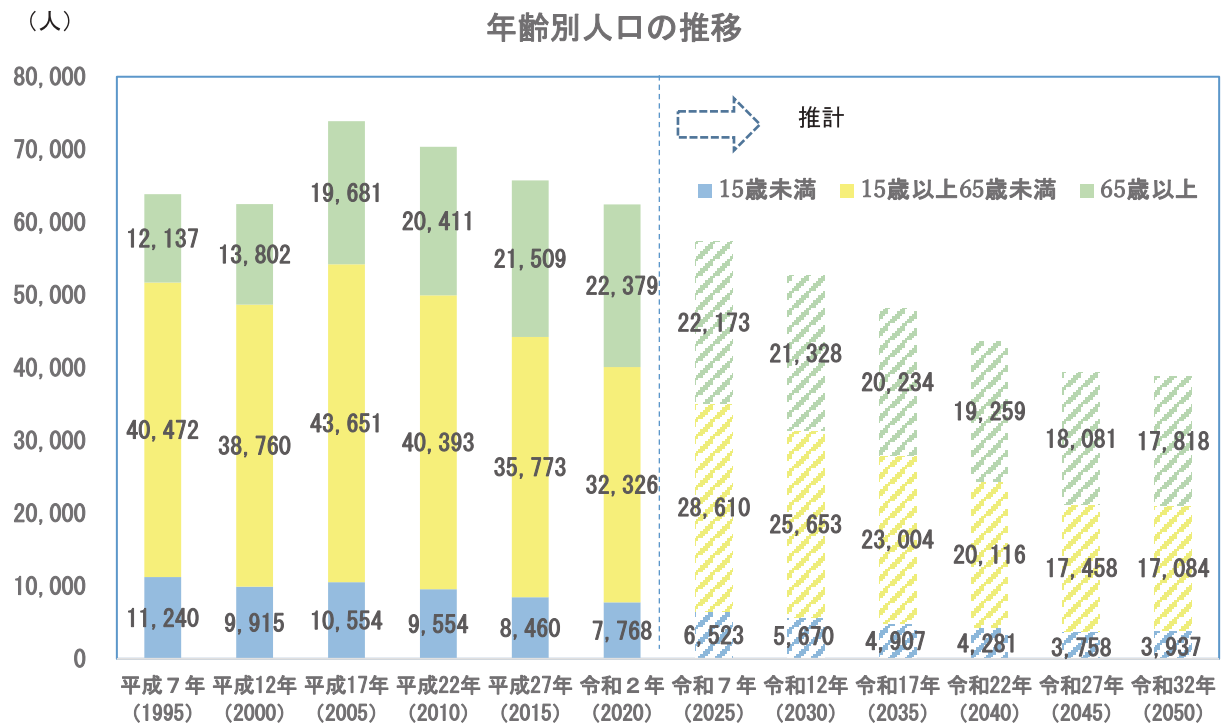
(1) 人口

本市の人口は減少傾向にあり、平成17（2005）年の市町村合併時点では74,165人になったものの、令和2（2020）年に実施した国勢調査の結果では62,657人、直近の令和7（2025）年9月末では59,431人と減少は続いている。

令和2（2020）年度の日田市の年齢別人口によると、0～14歳の幼年人口12.4%、15～64歳の生産年齢人口は51.6%、65歳以上の老年人口は35.7%となっている。特に、高齢化の進展は全国的な傾向であるものの、全国平均28.0%を上回り本市の急速な高齢化がうかがえる。

国立社会保障・人口問題研究所の算出方法に準拠した国のデータによると、令和7（2025）年に本市の人口は6万人を割り込み、令和27（2045）年には39,297人となる見込みである。

また、RESAS（地域経済分析システム）の令和2（2020）年の昼夜間人口比率は100.39%と、都市部のベッドタウンとは異なり、住んでいる人が、市内で就労、就学している状況を示していることから、今後、市民協働・連携による本計画の推進が重要となってくる。



【図 1-8 日田市の年齢別人口の推移（資料：総務省統計局「国勢調査」、国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」）】

（２）土地利用

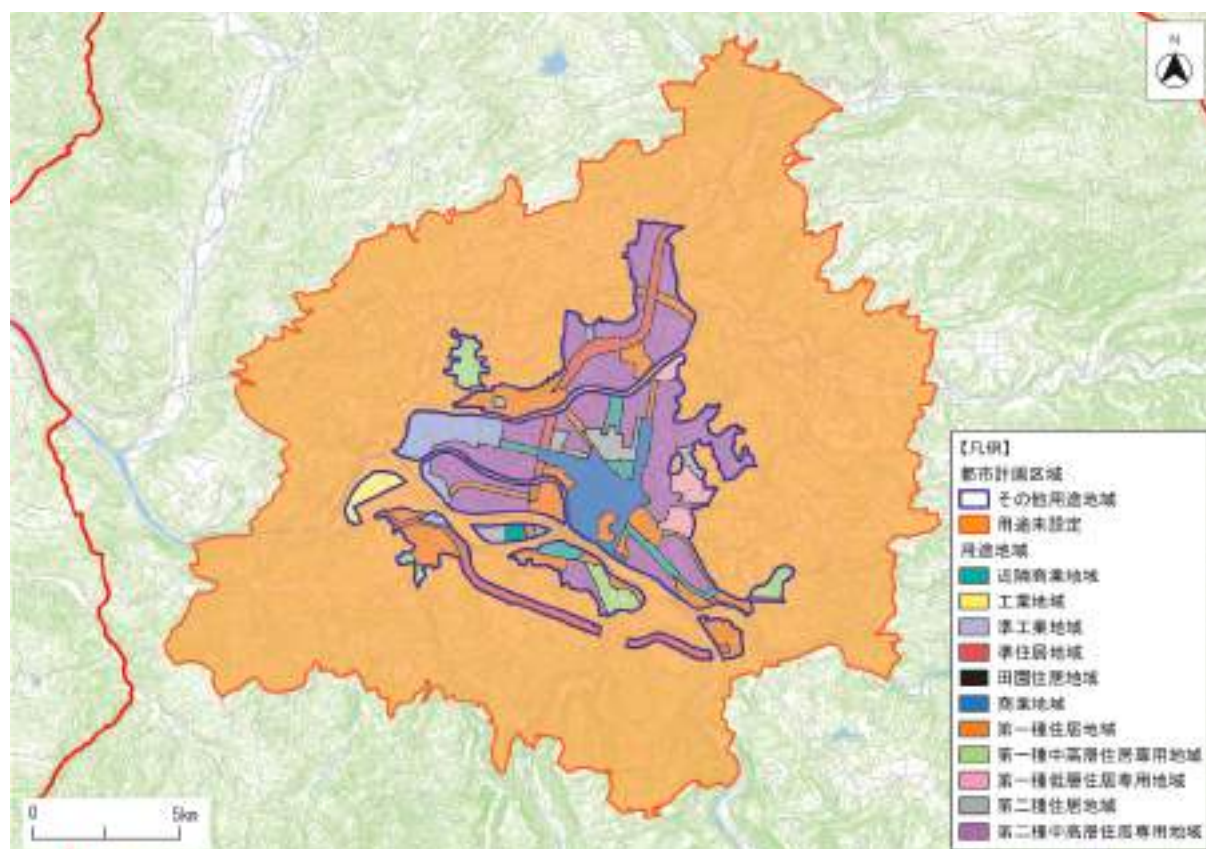
本市の総面積 666.03 ㎢の約 80%が山林や竹林などで構成されており、本市の標高 200m 未満の平坦地は、市街地や水田に利用されている。また、天瀬地域南部の台地上の平坦地や緩傾斜地は、集落地や水田、牧場などに利用されている。

また、本市には総面積の 9.9%にあたる 66.25 ㎢の区域面積を有する日田都市計画区域が指定されている。なお、面積として 12.44 ㎢、総面積の 1.9%の範囲が用途地域に指定されており、商業地域を中心に、行政などの中枢機能を担うほか、歴史文化の交流地や住宅地などに利用されている。

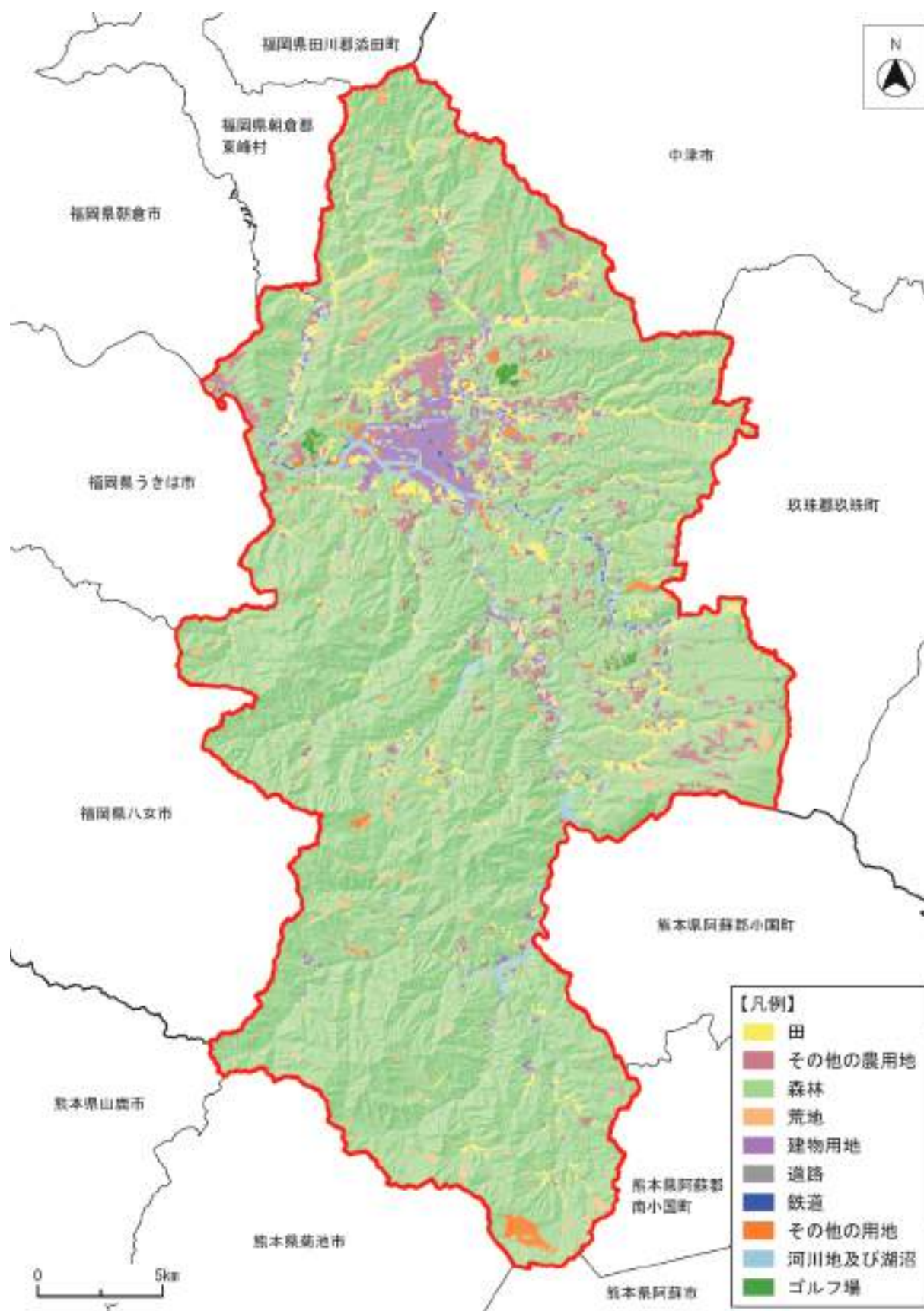
このうち、商業地域の指定を受けている国選定重要伝統的建造物群保存地区の豆田地区及び隈地区では、天領日田の面影を今に残し、四季を通じて観光客が訪れることから、歴史文化や自然環境と調和した都市景観の形成を図っている。

【表 1－1 地目別土地利用状況】

地目	田	畑	宅地	山林	原野	竹林	その他	合計
面積	17.9	15.7	14.81	524.42	18.15	7.82	67.23	666.03
割合	2.7	2.4	2.2	78.7	2.7	1.2	10.1	100



【図 1－9 都市計画図】



【図 1-10 土地利用図】

（３）産業

本市では、平坦地から準高冷地までの多様な地形と気候を生かした農業が行われている。基幹となる作物は水稻であり、積極的に野菜、果樹、畜産の産地拡大を目指した台地開発も推進されている。しかし、１戸当たりの耕地面積は少なく、自給的農家や準主業及び副業的経営体の割合が高いことが特徴となっている。また、65歳以上の基幹的農業従事者が全体の7割を超えるなど、高齢化が顕著に見られる。水産業については、豊かな水資源を生かした内水面漁業と観光資源としての活用を図っている。また、林業については、日田地方の気象は樹木の生育に大変適しており、江戸時代以降、急速にスギの植林が進み、日田下駄、家具、漆器などの木工業も盛んに行われ、「日田林業」として、本市の主要産業となっている。



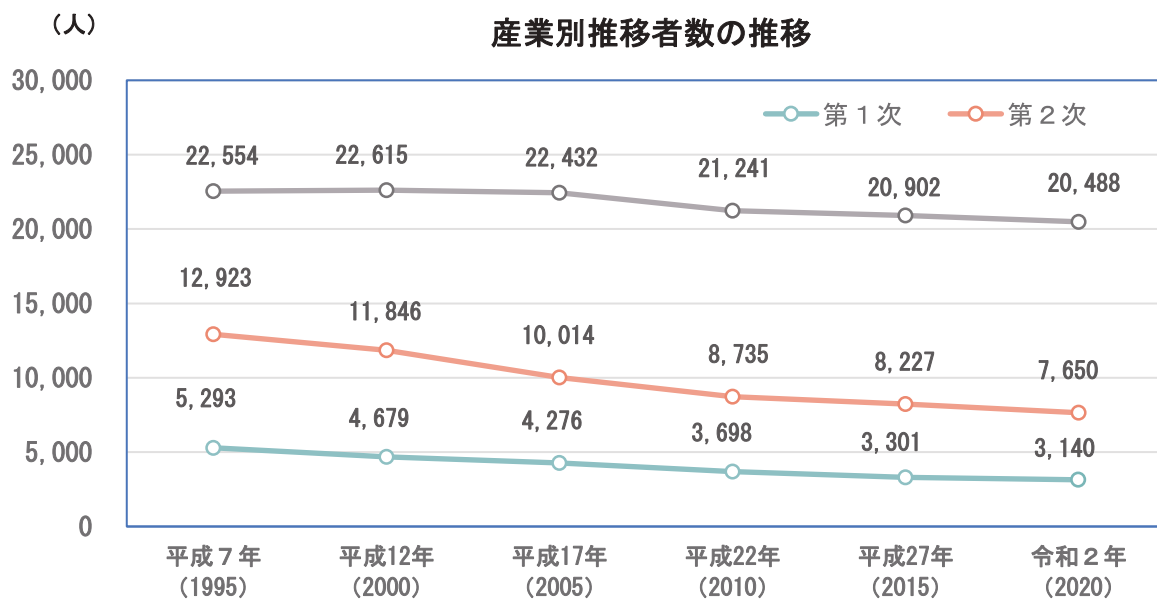
日田下駄の製作の様子

「日田林業」と呼ばれる所以は、火砕流によって形成された腐食に富んだ土壌は排水がよく、スギやヒノキの生育に適しており、江戸時代以降急速にスギの植林が進み、「日田杉」の名で全国にその名が知れわたるようになったことによるものである。

そして、市内の工業は、市域の約80%が森林という地理的要因もあり、木材や家具、パルプ・紙などの木材関連産業が、事業所数及び従業者数においても高い比率を占めており、基幹産業となっている。さらに、「水郷日田」と称されるように豊富な地下水源を生かした飲料産業の製造品出荷額は本市において大きなウェイトを占めている。

また、かつて天領であった本市では、先述した日田下駄をはじめとする様々な伝統工芸が隆盛していった。江戸時代中期に開窯した小鹿田焼^{おんたやき}は山の水・土・木などの地域資源を活かした焼き物であり、現在、9軒の窯元が家族労働のみで作陶し、伝統的技法による独自の作風を守り続けている。

本市の就業人口総数は、生産年齢人口（15歳～64歳）の減少、特に若い世代（25歳～34歳）では転入より転出が上回る社会減がみられることに加え、少子化の進行や団塊の世代が現役を退くことによる労働力の減少を受け、令和2（2020）年に実施した国勢調査の結果では31,278人であった。これは同年の生産年齢人口の約97%にあたり、住民の大部分が市内で就労していることがわかる。また、産業別に見ると、第3次産業への従事者が大部分を占めており、第1次、第2次産業の従事者が少ない現状にある。



【図 1-11 日田市の産業別就業者数の推移（資料：総務省統計局「国勢調査」）】

(4) 観光

本市は、古くから北部九州の各地を結ぶ交通の要衝として栄え、江戸時代には天領として西国筋郡代の役所が置かれるなど、九州幕府領の政治・経済の中心地として繁栄し、当時の歴史的な豆田町（国選定重要伝統的建造物群保存地区）の町並みや小鹿田焼（国指定重要無形文化財）の伝統文化などが今なお脈々と受け継がれており、これらは重要な観光資源となっている。

また、毎年夏に行われる祇園祭では、江戸時代から作られるようになった豪華絢爛な山鉾が隈・竹田地区や豆田地区を巡行し、毎年多くの人々が訪れている。

昭和25（1950）年、大分県、福岡県、熊本県にまたがる耶馬、日田、英彦山が国内初の耶馬日田英彦山^{ひたひこさん}国定公園に指定され、昭和36（1961）年からは、水と緑と温泉のまちとして、三隈川での情緒を満喫できる遊船での宴と鵜飼の鑑賞を中心とした観光振興に取り組んできた。

以来、観光業は本市における重要な産業の一翼を担っている。

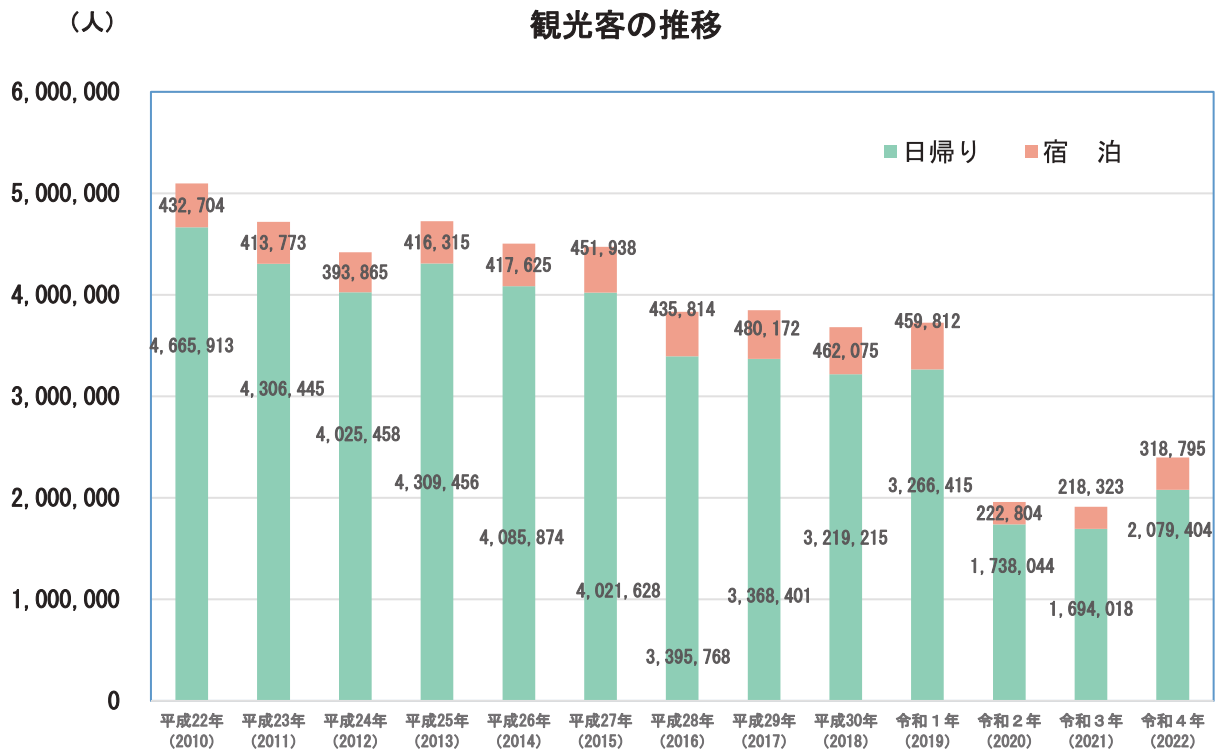
そして、本市には文化財に加えて、歴史ある天ヶ瀬温泉などの温泉をはじめ、鯛生金山^{たいおきんざん}の坑道探検や上津江フィッシングパークなど、多彩な観光施設や見所が所在する。

近年では人気漫画『進撃の巨人』の作者 諫山 創 氏の出身地ということもあり、市内にはキャラクターの銅像などの関連スポットが設置され、漫画の舞台を彷彿とさせるロケーションも人気となっている。

今後も、豊かな自然や歴史文化など、様々な特色ある資源をさらに磨き上げるとともに、埋もれている資源を掘り起こし、これらを相互に連携・活用していくことで、新しい人の流れをつくり、地域全体の活性化を図っていくことが求められている。



鯛生金山



【図 1-12 日田市の観光客数の推移（資料：日田市『日田市八十年史』）】

（５）交通アクセス

本市は北部九州の中心に位置することから、アクセス面において結節点の役割を果たしており、高速道路を利用すれば、福岡市や熊本市、大分市などの主要都市までの所要時間はおよそ１時間である。

鉄道は、ＪＲ久大本線が大分から久留米の間を結ぶ。ＪＲ日田彦山線は日田と小倉の間を結んでいたが、平成29（2017）年7月の九州北部豪雨で甚大な被害を受けた添田と夜明の間はＢＲＴ（バス高速輸送システム）で復旧することが決定し、令和5（2023）年8月に開業した。

主要幹線道路は国道210号、386号、211号及び212号の4本の交通幹線がそれぞれ放射状に福岡など北部九州の主要都市に通じている。さらに高速道路、九州横断自動車道長崎大分線大分自動車道の開通により県北西部における交通網を確立している。

バスでは福岡方面・大分方面・長崎方面に走る高速バスのほかに、周辺市町村や市内の各地域を結ぶ路線バスや市内循環バス「ひたはしり号」、福祉バス、事前予約制の乗合デマンドタクシーを運行している。



BRT

また、40 ページの図 1-12 が示すように、本市の観光客の 87% が日帰客であり、行先としては隈・豆田地区に集中していることから、文化財の活用にあたっては、市内循環バス沿線の文化財の紹介、自家用車利用者への案内板の設置、文化財の周遊ルートづくりなどの取組が必要である。

（6）文化財関連施設

本市には、文化財関連の施設として、公共の施設が 13 箇所、民間の施設が 2 箇所ある。

公共の施設のうち、展示機能がある施設としては埋蔵文化財センター、咸宜園教育研究センター、博物館、日田祇園山鉾会館、豆田まちづくり歴史交流館、天領日田資料館、慈眼山永興寺仏像収蔵庫、小鹿田焼陶芸館、郷土史料館、前津江郷土文化保存伝習施設、天瀬町ふるさと資料館が、その他の公開施設では、旧矢羽田家住宅と行徳家住宅（いずれも国指定重要文化財）がある。

また、民間の施設としては、公益財団法人廣瀬資料館（国指定史跡廣瀬淡窓旧宅及び墓の内の旧宅部分）や草野家住宅（国指定重要文化財）で資料展示や建物内部の公開が行われている。



【図 1-13 交通アクセス図】

3. 歴史的環境

(1) 通史

① 人々の生活と交易の始まり

本市の歴史は、日田盆地の南東に広がる五馬高原で確認された高瀬Ⅲ遺跡の焚火跡などから34,000年前に遡る。五馬台地一帯では狩猟や採集の生活を示す亀石山遺跡など多くの旧石器時代の遺跡が確認されている。

12,000年前に始まる縄文時代では、早期・前期・中期の遺跡が五馬高原で見ついているほか、日田盆地内の三隈川や大肥川、大山川流域などで遺跡が確認されている。また、瀬戸内地方を中心に分布する土器などが見つかり、他地域との交流が行われていたことが分かる。

稲作に代表される弥生時代は、石庖丁などの磨製石器や鏡・武器類などの青銅器、鉄器といった大陸文化が流入し、縄文時代から飛躍的な成長を遂げることとなった。こうした文化は大陸に面している福岡県や佐賀県に流入したのち、これらの地域の影響を受けた文化が地理的に近い日田にも伝来した。本格的な弥生文化の日田地方への伝播は、弥生時代前期後半には始まる。当時の集落は小河川流域や台地上に営まれ、また集落の近くには墓地も造られた。これらの遺跡からは北部九州の影響を受けた弥生土器や石器などが出土し、日田で北部九州と同時期に稲作が始まったことを示すとともに、盛んに交流が行われていたことが分かる。さらに、弥生時代中期には、日田の地を統率する首長が登場し、拠点集落が作られるようになる。日田盆地を見下ろす台地上に位置する吹上遺跡(県指定史跡)では、地域を治める有力者の墓である甕棺墓から銅剣や勾玉、南海産貝輪などの豪華な副葬品が見つかり、



吹上遺跡出土品

② 日田盆地の古墳文化

古墳時代初頭、日田の中心集落となったのは周りに溝を方形に巡らせた集落や豪族居館が発見された小迫辻原遺跡(国指定史跡)である。また、本市では、約70基の古墳が確認されているが、その多くが後期(6～7世紀)の築造である。中期(4世紀末～5世紀)にも、薬師堂山古墳(県指定史跡)や姫塚古墳(市指定史跡)、丸山古墳(市指定史跡)などといった円墳が築造されるが数は少なく、権力の大きい首長の存在を示す前方後円墳はみられないことから、日田の首長層は筑後川下流域の首長の勢力下に置かれていたことがわかる。

一方、中期は筑後川を通じた集落レベルの交流により、求来里川流域などの集落ではカマドが導入され、盆地内の河川沿いなどで鉄作りが行われるようになった。

後期になると日田の古墳にも変化がみられ、本市最大の前方向後円墳である朝日天神山古墳群(県指定史跡)のほか、ガランドヤ古墳(国指定史跡)や穴観音古墳(国指定史跡)、法恩寺山古墳群(国指定史跡)といった筑後川下流域の影響を受けた装飾古墳など首長クラスの墓が築造された。



ガランドヤ1号墳

③ 律令国家と日田郡の成立

大宝元（701）年に大宝律令が制定された後、国郡里制が定められ、現在の本市域とほぼ同じ「^{ぶんごのくに ひ た の こおり}豊後国日田郡」が成立した。この豊後国の支配には中央から派遣される国司があたり、日田郡の支配は在地の有力豪族の中から選ばれた郡司の^{くさかべ}日下部氏があたった。

日田の名前がはじめて文献で確認される『豊後国風土記』には、日田郡に駅が置かれたと記されている。駅とは古代官道沿いに設置された交通手段としての馬の乗り継ぎや休憩、使者の宿泊などを行う施設のことであり、日田では三隈川の南岸に位置する石井郷にあったとされる。

日田郡内の律令期の姿を想像させる遺跡は多数発見されており、^{おおはら}大波羅遺跡では大型柱列や建物群、文字が書かれた土器（^{ぼくしよ}墨書土器）や硯、瓦などが出土しており、郡衙などの日田郡の役所と想定されている。また、建物群や郡司職の名称である「^{だいりよう}大領」と書かれた墨書土器が出土した小迫辻原遺跡は、郡司の館と考えられている。そのほか、上野第1遺跡では道路や倉庫群とともに「^{とよめとよめ}豊馬豊馬」と刻まれた石製品である^{けん}榿（古代の役所で使用された^{はかり}秤に使われたおもり）が出土しており、「石井駅」の候補地である。



大波羅遺跡の柱木

古代において、宇佐神宮領は九州各地にあったが、古代末期には日田五箇所など、盆地中心部の開発が本格化した。

④ 中世社会と大蔵氏

古代において日田を支配していた日下部氏に代わり、中世の武士階級を代表し日田を掌握する郡司職についたのは大蔵氏である。大蔵氏は各地域に配置した同族及び他豪族を統合して、西豊後に一大勢力を築いた。その初期には中央の貴族の庇護を受けて勢力を確実なものにし、後期には豊後国守護の大友氏に従いながらも独立を確保していた。

大蔵氏の出自については定説がなく、歴史上に確認できるのは「日田どん」と呼ばれる大蔵^{なが}永季からである。その後、『^{ぶんごのくに ひ た ぐんじしきだい}豊後国日田郡司職次第』によると、長寛元（1163）年大蔵^{ながおね}永宗のとき、日田郡司職を巡る一族内の争いを防ぐため、領地を鳥羽上皇建立の^{こんごうしんいん}金剛心院の荘園として差し出し、大蔵氏の日田郡支配を確固たるものにした。

日田郡の中で有力な武士として成長した大蔵氏は日田氏を称するようになり、建久5（1194）年に鎌倉幕府から日田の地頭に任じられ、日田の領主となった。弘安8（1285）年に整理された『^{こうあんずでんちよう}弘安図田帳』には、日田郡は560町のうち、^{ひたのしょう}日田荘500町、大肥荘60町（大宰府安楽寺領）で、日田荘のほとんどを大蔵氏の一族である^{じとうしき}地頭職の日田^{ながもと}永基が支配していた。この大蔵姓日田氏は、南北朝時代には北朝に味方し、室町幕府4代将軍の足利義持の奉公衆にも選ばれており、幕府との強いつながりがあった。その後、文安元（1444）年に日田氏内部で家督争いが起こり、この大蔵姓日田氏は断絶したが、豊後国守護であった大友氏から養子を迎えて、日田氏を再興した。しかし、天文17（1548）年に、



日田神社

日田親将^{ちかまさ}が大友氏本家の20代当主である大友義鑑^{よしあき}に謀反を計画したことが露見したため、親将は自害し、約500年にわたり日田郡を治めた日田氏は断絶した。その後、大友義鑑は日田大蔵氏の家臣や庶家であった坂本・財津^{さいつ}・羽野^{はの}・石松・高瀬・佐藤^{つづみ}・堤^{せとぐち}・世戸口氏らを郡老として日田を治めさせ、太閤蔵入地になる文禄2（1593）年まで、大友氏が日田の地を支配した。

大蔵氏^{じげんざん}は慈眼山に城を構えて本拠地とし、現在でも慈眼山周辺には「高城」「古城」といった地名が残っている。また、山麓には大蔵氏に関連する遺跡が広がっており、出土した遺物には日常で使われた素焼きの土器のほか、博多を介した中国との貿易を示す輸入陶磁器や渡来銭、鞘や刀といった武具や箸・杓文字などの生活具、基石や独楽などの遊具など多彩な遺物が出土しており、中世日田の往時の様相や実態を知る手がかりとなっている。

⑤ 中世の津江

現在の本市の南部を占める前津江町・中津江村・上津江町から北東に連なる大山町にわたる一帯は、古文書などには、安楽寺（太宰府天満宮）の所領として現れる。

しかし、太宰府天満宮によるこの地域の支配は、観応^{かんのう}3（1352）年に専当^{せんとう}によって押領^{おしりょう}された。この専当とは太宰府天満宮がこの地域を支配・管理する実務担当として任命した荘官^{しょうかん}で、中世においては津江長谷部氏である。

津江長谷部氏は室町期以降、一貫して津江地域を地盤にした在地領主で、戦国期には津江氏を称し、豊後国守護大友氏の被官^{ひかん}であったことが、わずかな古文書から判明している。ところが、大友氏は文禄の役で味方を救援せず、撤退したことを豊臣秀吉に咎められ、所領を没収された。大友氏に従っていた津江氏も領地を失い、一族のある者は帰農し、またある者は新たな仕官先を求めた。こうして津江氏の衰退と共にこの地域の中世は幕を閉じ、近世を迎えることになる。



伝来寺庭園

⑥ 古代・中世を生きる人々の信仰

本市では中世以前から様々な信仰があった。平安時代では、薬師信仰や観音信仰が盛んになり、酒楽神社にある薬師三尊や永興寺^{ようこうじ}にある観音菩薩像、また吹上観音坐像（市指定有形文化財）などが当時の信仰の姿を伝えている。

特に、慈眼山の中腹にある永興寺^{ようこうじ}は大蔵永季^{ながおき}が父永興を供養するために延久年間（1069～1073）に建立したといわれる。

平安時代から鎌倉時代に京都や奈良の仏師によって造られた仏像群が遺されており、日田一帯を治めた大蔵氏の栄華を今に伝えている。大蔵氏の後期の隆盛を顕示するのは岳林寺^{がくりんじ}である。康永元（1342）年に10代当主の大蔵永貞^{ながさだ}が元の渡来僧の明極楚俊^{みんききょしゅん}を開基として創建し、中世に造られた仏像や絵画が今も残っている。



岳林寺

山岳信仰では、英彦山が古くから神の山として信仰され、中世には修験道の道場として栄えた。本市にある烏宿山^{うしゆくやま}も女人禁制の霊山として昔から信仰され、山頂に大山烏宿神社が鎮座している。この他にも、日田周辺には仏教に関連した名前の山々があり、山岳信仰の名残といえる。

また、大山町では、原始仏教の教説を説いた「華嚴經^{けごん}」、「大集經^{だいじつ}」、「大品般若經^{だいほんはんによ}」、「法華經^{ねはん}」からなる五部大乗經^{ごぶだいじょうきよう}の写經が残されており、天台宗の寺院があったことがうかがえる。

そのほか、本市には鎌倉時代から造られるようになる五輪塔^{かさとうば}や笠塔婆^{かさとうば}、石仏^{ほうきよういんとう}、宝篋印塔^{せきどう}、石幢^{いたび}、磨崖種子^{まがいしゆじ}などの石造物が多く残っている。これらの石造物は、往時の人々の信仰をうかがい知ることができる重要なものである。

三隈川流域では、日田五箇所と呼ばれる宇佐神宮領^{おおはらはちまんぐう}が11世紀前半に開発され、大原八幡宮が宇佐八幡系における日田地方の総社である。一方、平安時代末から太宰府天満宮の荘園となっていた前津江町・中津江村・上津江町から大山町にわたる一帯には、太宰府系の老松天満社が多く残されており、津江七社^{つえしちや}と呼ばれる。津江地域は雷が多かったことから、雷神の要素も兼ね備えた天神の菅原道真^{すがわらのみちざね}が老松神の名前で、人々に受け入れられ、今も信仰されている。

⑦ 日田の町並みの形成

文禄2（1593）年に大友氏が改易された後、日田は豊臣秀吉の直轄地である太閤蔵入地^{たいこうくらいりち}となった。翌年の文禄3（1594）年、秀吉の代官として派遣された宮木長次郎^{みやきちやうじろう}が日隈山に日隈城を築いた。宮木氏は田島村^{たしまむら}にあった町場を日隈城の城下に移して三隈川の右岸に隈町をつくった。隈町の中心ではこの三隈川沿いに商家が軒を連ねた。また、町の南北には寺院を配置し、東西南北の入口には門を造り、通行人を規制していた。また、現代まで日田で継承されている鵜飼は、この時期に始まったといわれる。



豆田町

慶長元（1596）年、宮木氏の後には、毛利高政^{もうりたかまさ}、黒田孝高^{くろだよしたか}（家臣の栗山利安^{くりやまとしやす}が在城）が日隈城の城主となって支配したが、後に日田郡北部の夜間郷^{やけ}・渡里郷^{わたり}は小川光氏^{みづうじ}、南部の刃連郷^{ゆきい}・石井郷は幕府領で毛利氏預かり、有田郷は森藩領となった。

慶長6（1601）年、小川氏は月隈山に丸山城を築き、城下町として丸山町を造った。元和2（1616）年になると、譜代大名の石川忠総^{ただふさ}が日田に入り、丸山城を永山城^{ながやまじょう}と改め、城下町として中城村^{なかしやう}に豆田町^{まめだまち}をつくった。豆田町の中心の南北に走る通りは、上町^{うわまち}と下町^{したまち}と呼ばれていた。通りに面して、各町が配置されており、川端町^{かわばたちやう}や風呂屋町^{ふろやちやう}などの名前が付いていた。

近世の日田の町並みの基礎を築いた隈町と豆田町は、日田が天領となった後、経済の中心地として栄えた。

⑧ 日田代官による支配

寛永10（1633）年、石川氏が下総佐倉に転封となると、日田は大名預かり地となり、寛永16（1639）年、天領となった。日田の代官所は永山布政所や日田御役所と呼ばれ、永山城のふもとに置かれた。

歴代の日田代官のうち、池田喜八郎の享保2（1717）年に支配地は10万石となった。享保9（1724）年に代官となった増田太兵衛以降は、日田代官所が九州の豊前・筑前・肥後・日向などの天領の支配の拠点となり、四日市（現在の宇佐市）・富岡（現在の熊本県苓北町）・富高（現在の宮崎県日向市）の代官を兼任した。

また、享保19（1734）年に代官となった岡田庄太夫の時には、幕府財政再建のため徴税政策や助合穀銀などが実施され、農民の負担が増大した。延享3（1746）年に、馬原村庄屋の穴井六郎右衛門を中心として岡田代官の更迭を求めた「馬原騒動」といわれる百姓一揆が起きた。その後、宝暦8（1758）年に代官となった岡田庄太夫の次男揖斐十太夫は、明和4（1767）年に西国筋郡代に昇格した。これは関東・美濃につづき全国で3番目に設置された役職で、九州における天領の支配にあたった。

文化14（1817）年、塩谷大四郎が代官となり、文政4（1821）年に郡代に昇格した。塩谷代官は、現在も利用されている小ヶ瀬井路の開削、隈川・中城川の改修と通船、日田－玖珠間の道路改修、周防灘沿岸の新田開発などの公共事業に努めた。小ヶ瀬井路の開削には豆田町の廣瀬久兵衛や草野忠右衛門などが世話人として願い出て、農民や商人などの民間からの出資で実施された。この小ヶ瀬井路ができたことにより、近隣農村の田畑が潤い、干ばつの被害がなくなった。小ヶ瀬井路以外にも現在の本市内には江戸時代に整備された水路が多く残っており、「水郷日田」の由縁となっている。



小ヶ瀬井路

そのほか、文政2（1819）年、塩谷代官の発案により、豆田町及び隈町の豪商が協力し、災害などに備えて米を蓄えておく隠徳蔵を設けた。他にも、目が不自由な人の養育のため、盲人養育田も設置した。

元治元（1864）年に着任した最後の日田代官が窪田治部右衛門である。江戸時代末の動乱の時期にあったため、農兵隊を組織するなど代官支配の維持を図った。集まった農兵隊の教育・訓練の拠点は後述する咸宜園の東塾におかれた。形式上は咸宜園の塾生となるも、目的が異なる農兵隊の存在に咸宜園の運営は大いに乱れた。慶応4（1868）年に四日市の代官所が焼き討ちされ、その報告を聞いた窪田は肥後に逃亡した。

⑨ 江戸時代の交通と日田商人の活躍

日田は北部九州のほぼ中心に位置し、古くから交通の要衝であった。近世においては、日田代官所を起点として、各城下に向かう六つの陸上交通路が使われていた。

【表 1-2 近世の陸上交通路一覧】

①	宇佐・中津方面	豊前国宇佐宮路 中津城路 石坂石畳道（県指定史跡）
②	彦山・小倉方面	彦山路 小倉城路 岳減鬼新道
③	筑前・福岡方面	筑前国路 福岡城路 小月橋
④	筑後・久留米方面	筑後国高良山路 久留米城路 加々鶴新道 筏場眼鏡橋
⑤	肥後阿蘇・熊本 豊後竹田方面	肥後国阿蘇山路 隈府道 熊本城路 直入郡岡城路 台神社の石畳（市指定史跡） 曾田の台
⑥	玖珠方面	玖珠郡森宮路 川原隧道と石畳（県指定史跡）



【図 1-14 近世の陸上交通路】

（図中の番号は上記の六つの陸上交通路の一覧と対応している）

陸上交通路には難所がいくつかあり、商人や地域の農民たちが力を合わせて、石畳道や隧道、石橋を造った。また、文政8（1825）年に小ヶ瀬井路が完成した後、川を利用した水運である日田川通航が実現した。豆田町の中城河岸や隈町の竹田河岸から年貢米や特産物が運ばれ、長崎に到来した中国の文物が日田経由で大坂や江戸に運ばれた。

近世初期に築かれた城下町である豆田町や隈町には、陸上交通を利用して多くの商人が集まり、活発な商業活動が行われた。最初は周辺地域との農産物の取引から始まり、やがて産物仲介業が盛んとなった。こうした資本を基として、金融貸付業を行うようになり、さらには九州各藩の御用を勤める「御用達」になることによって、幕府の公金を取り扱う「掛屋」が誕生した。この当時の日田の金融資本は「日田金」と呼ばれ、九州諸大名を相手に利益を上げ、日田は九州の金融の中心地となった。



石坂石畳道

有力商人には、豆田町に丸屋（千原家）・博多屋（廣瀬家）・伊予屋（手嶋家）・升屋（草野家）・俵屋（合原家）、隈町に京屋（山田家）・鍋屋（森家）があり、金融業のほか、それぞれ製蠟、油製造・醸造（醤油・酒）など広く営んでいた。豆田町や隈町が大火や水害などの多くの災害に見舞われたことから、これらの有力商人の住宅の中には、災害に強い居蔵造と呼ばれる建物構造としたものもあり、今も豆田町に残る草野家住宅などに見ることができる。

また、日田の商人が経済的に豊かになることで、整備された交通網を通じて、様々な文化人も日田を訪れ、俳諧や茶道、華道など文化的な活動が盛んになった。

⑩ 天領日田と産業、伝統行事

人々の往来が多かった天領日田では、経済だけではなく、産業や文化も発展した。豊臣秀吉の代官である宮木長次郎がもたらしたといわれる鶏飼は、江戸時代を通して代官に庇護され、現在は観光鶏飼として本市の代表的な夏の風物詩である。

小鹿田焼は、江戸時代中頃に小石原焼（現在の福岡県朝倉郡東峰村）の陶工であった柳瀬三右衛門らによって開窯された李朝系の民陶である。元文3（1738）年に、代官の許可を受け、以来300年余り伝統的な技術が継承されている。

本市に今も伝えられている伝統行事に、江戸時代を起源とする日田祇園がある。祇園会自体は古くから行われていたが、山鉦が曳き廻されるようになったのは正徳4（1714）年から、山鉦の台で演奏される祇園囃子は文化14（1817）年頃に始まった。現在、隈・竹田・豆田の各地区で計9基の山鉦が毎年7月20日過ぎの土日に巡行し、豪華絢爛な見送り幕などに往時の天領日田の繁栄を偲ぶことができる。



日田祇園

⑪ 近世の農村の暮らし

農村では、自然災害による飢饉や伝染病の流行など、人々の生活は過酷であった。大蔵永常は若い頃の大飢饉をきっかけに、九州諸国を転々とし、農民に役立つ作物の栽培・加工方法などを学んだ。後に大坂に渡り、農民にも分かりやすい栽培方法が記された農業書を数多く刊行した。さらに田原藩（現在の愛知県）や、浜松藩（現在の静岡県）に農業指導者として招かれ、晩年は、江戸で集大成ともいえる『広益国産考』を刊行した。大蔵永常の功績により、日本の農業技術は

向上した。

農村に住む人々は、雨乞いや豊作祈願、無病息災などを神仏に祈り、祭りを行ってきた。今でも秋の祭日に合わせて奉納される楽が本市の各地域で行われている。天瀬町のくにち楽、前津江町の大野楽、三ノ宮町の磐戸楽など、杖を用いたものや河童の所作をするものが伝わっている。他にも、中津江村では中世に起源をもつ的ほがし祭と餅搗祭などが伝えられる。

江戸時代、日田の山林は、幕府直轄の御用林として確保されていた。相良吉三郎は竹を筏に組んで三隈川を西に下り、川下の地域で材木や竹を売る「竹木旅出商売」をはじめ、日田の林業を大きく前進させた。また、『相良家文書』によると、享保19（1734）年に吉三郎が日田郡入江村の3兄弟を日向国の奈須山の木材伐採の折に派遣し、スギ苗の植え付けや伐採などの方法を学ばせたことにより、日田にて本格的なスギの植林が始まったとされている。水運が発達した後、本市への木材需要が高まり、紙の原料となるコウゾやろうそくの原料となるハゼなどの商品作物栽培も拡大していった。その後、大正時代には日田下駄の生産が増加し、昭和時代には日田漆器や日田家具の生産が増加するなど、「日田林業」と称される所以となった。



木材搬出の様子

⑫ 廣瀬淡窓と咸宜園

天明2（1782）年、廣瀬淡窓は豆田町の商家である博多屋（廣瀬家）の第五世三郎右衛門の長男として生まれた。幼少から父に書道や四書の句読を教わり、10歳のときに漢詩を学んだ。16歳になると、福岡の亀井南冥・昭陽親子の亀井塾に入門し、学問や詩作に励んだが、18歳のときに大病を患い、志半ばで日田に帰った。

文化2（1805）年、24歳のときに教育者を志し、豆田町の長福寺の学寮で塾を開いた。その後、豆田町の成章舎や豆田裏町の桂林園などに場所を移し、文化14（1817）年、36歳のときに堀田村に咸宜園を開いた。咸宜園には全国から門下生が集まり、嘉永5（1852）年には塾の在籍者が233名と、最盛期を迎えた。安政3（1856）年に淡窓が亡くなった後も、廣瀬青邨や林外などの養子や門下生たちが塾主を引き継ぎ、明治30（1897）年に閉塾するまで咸宜園は80年存続した。全国60か国以上から5,000名を超える門下生が集まった近世日本最大の私塾であり、咸宜園の門下生には、近代日本の夜明けに活躍した人物が多く存在している。



廣瀬淡窓

咸宜園では、入門時に身分・年齢・学歴を問わない「三奪法」や毎月の成績評価「月旦評」などにより、門下生たちを平等に教育していたとされる。咸宜園教育の特色は、長年にわたる教育実践の中で創り上げた教育のシステムにあり、その代表的なものが前述の「月旦評」や「規約（82則）」の作成、塾の自治運営のための役割を門下生に与えた「職任」制度、詩作の奨励（情操教育）などである。

咸宜園跡は、昭和7（1932）年に国史跡に指定、平成27（2015）年には咸宜園跡や廣瀬淡窓に関する文化財などが、「近世日本の教育遺産群-学ぶ心・礼節の本源-」のストーリーの一部として日本遺産に認定され、咸宜園での教育は今も本市の人々に受け継がれている。

⑬ 日田市の誕生

慶応3（1867）年の大政奉還により幕藩体制が崩壊すると、日田は新しく「日田県」となった。初代日田県知事には薩摩藩士松方正義^{まつかたまさよし}が就任し、町人たちの協力を得て身寄りのない乳幼児を保護する養育館の建設を行った。また、産業を興すため県営の質屋兼両替商の機能を持つ生産会所を設立し、植林や養蚕の奨励、道路や橋梁の修繕、小ヶ瀬井路の改修などを実施した。

一方、明治3（1870）年11月17日に日田県一揆（竹槍騒動）が勃発した。この一揆は明治2（1869）年の大凶作により多数の餓死者が出たにも関わらず、政府の救済策はなく、逆に大增税を行ったことに起因するものであった。一揆は数千名から1万名の農民が加わって、3日間にわたり続き、多くの建物が焼き討ちや打ちこわしに合い、死傷者も多数出た。騒動が収まった後、明治4（1871）年2月には、関係者5名が処罰された。

明治4（1871）年には日田県は大分県に編入され、明治34（1901）年には豆田町と隈町が合併して日田町となった。その後、昭和15（1940）年に市制を施行、昭和30（1955）年、平成17（2005）年の合併を経て、現在の日田市となっている。

戦時下の日田には、本土決戦に備えて、北九州から日本陸軍の兵器工場である小倉陸軍造兵廠^{こくらりくぐんぞうへいしょう}が移転された。当時、九州地方には北九州の八幡製鉄所などが攻撃の標的となる中、日田でも清岸寺町や有田で空襲や銃撃を受け、数名の死傷者が出た。

こうした戦争の悲惨さを語るものとして、月隈山をはじめ、市内各所には現在も多くの防空壕が残っている。

大規模な空襲を免れた日田は迅速に戦後復興が行われ、昭和24（1949）年、本市が「重要木工集団地」として、更に翌25（1950）年には「耶馬日田英彦山国定公園」の指定を受け、木材資源を中核とする内陸型産業都市及び観光都市としての性格が打ち出された。



月隈山の防空壕

⑭ 近代産業の発展

明治時代は河川交通が主流の時代でもあったが、明治36（1903）年に筑後馬車鉄道が開設され、大正5（1916）年には日田と久留米を走る「筑後軌道」と呼ばれる鉄道が敷設された。その後、昭和3（1928）年に久大本線^{きゅうだいほんせん}（現在のJR久大本線）が延伸されて廃線となった。筑後軌道が久留米-日田間をつないだ期間は15年という短い間であったが、物資の運搬だけでなく、人の動きや文化の流入にも大きな影響を与えた。現在は、高井町の逆谷橋^{さかたにばし}や丸の内町の転車台などにその名残が見られる。



高井町の逆谷橋

日田における産業構造は近世から変わることなく、林業や木工業が中心であった。明治維新後の近代化による生活様式の変容は、木材需要の高騰を生み、明治25（1892）年には全森林面積の20%であったスギの人工林は、昭和初期には50%にも達した。そのほか、鯛生金山や女子畑^{おなごはた}発電所が明治期を代表する産業遺産として、今もその姿を残している。

中津江村にある鯛生金山は、明治27（1894）年に発見され、明治31（1898）年、採掘が開始された。その後、大正7（1918）年には当時としては類を見ない近代的な設備を導入し、アメリカ、ロシア、アジア各国の人々をハンターとして招き入れて大掛かりな採掘が行われた。そして、新鉱脈の発見もあって昭和12（1937）年には国内第一位の産出量を記録し、「東洋一の産金鉱山」としてその名を馳せた。第二次大戦後は産出量が下降し、昭和47（1972）年に75年の歴史を閉じたが、現在も坑道や製錬所、石風呂などが残っている。

天瀬町女子畑では明治45（1912）年に発電所が起工、大正2（1913）年に完成し、当時の日田郡内に広く電力を供給した。現在も稼働している女子畑発電所は、今日の九州電力株式会社の出発点にもなり、現在も大正時代の建造物が残る。

（2）災害史

山間部にある日田は、中新世紀以降の火山活動により誕生した地形で、浸食作用により急傾斜地が多い。そのため、集中豪雨や長雨が続きと傾斜の急な周囲の山々から大量の雨水が一気に三隈川に流れ込み、幾度となく水害に見舞われてきた。洪水による被害の大きさは、古代から日記や記録に残されており、10世紀中頃の記録が最も古いものである。

明治以降では、明治22（1889）年、大正10（1921）年、昭和28（1953）年に大洪水があり、その中でも特に昭和28（1953）年6月の大洪水では、日田地方に降った猛烈な大雨によって三隈川が氾濫し、その流れを塞ぎ止めた三隈大橋から激流が市街地に流れ込み、市街の9割の家屋が浸水したほか、死者・行方不明者19人、流出家屋571棟などの大きな被害を残した。この大洪水の後、三隈川の拡幅などの大規模な改修や、上流に松原ダムと下笠ダムの建設が行われ、市民の安全が図られることとなった。また、令和6（2024）年には、三隈川沿いの斜面で、明治22（1889）年の洪水を記録した石碑が確認されており、水害を伝える貴重な文化財の一つである。



水害の様子を伝える石碑

平成24（2012）年、平成29（2017）年、令和2（2020）年にも洪水は発生し、生活や観光に大きな影響を及ぼした。平成24（2012）年の豪雨では、小鹿田焼の里（国選定重要文化的景観）の池ノ鶴地区で棚田や河川の石積みが崩壊、石坂石畳道（県指定史跡）では路肩が崩れ、石畳が流失する被害が生じた。また、県内最古の石造アーチ橋であった筏場目鏡橋（県指定有形文化財）が平成24（2012）年と令和2（2020）年の豪雨で2度にわたって被災し、復旧が不可能と判断され、指定解除となった。このように、日田を流れる川は人々に恵みをもたらす反面、今日まで多くの被害をもたらしている。

また、平成29（2017）年豪雨では、豆田町（国選定重要伝統的建造物群保存地区）で花月川から取水している城内川の溢水により多くの家屋が浸水するなどの被害があった。小鹿田焼の里（国

選定重要文化的景観）においては、平成29（2017）年と令和5（2023）年の豪雨で焼き物の陶土を作る唐臼の破損・流失や棚田の崩壊などの被害が発生した。

さらに台風被害にも度々見舞われており、特に平成3（1991）年9月の台風19号では、昭和19（1944）年の統計開始以来の第1位の瞬間最大風速を記録し、農林業に甚大な被害をもたらした。

このほか、火災についても、多数発生していることが江戸時代以降の記録に残っており、住宅密集地であった豆田町や隈町が被害に遭い、多数の命が奪われた。隈町の田中町には、大火で亡くなった人々のために塩谷代官によって建てられた供養碑が残っている。

風水害や火災以外では、古くは天武天皇8（679）年に筑紫地震による崩落で天瀬に温泉が湧いたことが豊後国風土記に記されている。平成28（2016）年の熊本地震では永山城跡（県指定史跡）の石垣が一部崩落し、石材が遊歩道をふさいだが、平成30（2018）年に修理が完了した。



永山城跡の被災状況

【表 1-3 日田市の主な水害記録（～昭和時代）】

年月	詳細（被害状況）
天慶元（938）年7月	会所宮善神王社、大原社の惣門が流される。
至徳3（1386）年8月	玖珠川三日三晩の大洪水、至徳の赤水。 8月15日から1か月雨止まず、死者800名余。
天正6（1578）年	玖珠川氾濫日田村中一面水浸し。
天正8（1580）年4月	日田郡五馬荘竹首渡、雨水にて河水増大渡ることを得ず。
慶長19（1614）年	大洪水。
享保5（1720）年6月	21日と23日。大雨、豆田一面水没、床上浸水、600戸。
享保7（1722）年7月	2日と8日。大水。
享保10（1725）年5月	隈・豆田両町大水。114人流される。
享保13（1728）年6月	大水。
享保17（1732）年閏5月	大水。小野川より豆田、床上浸水。
寛保2（1742）年7月	隈川原町6軒流失。
延享2（1745）年7月	5日と13日。町中全面。床上浸水。
寛延2（1749）年5月	16日と20日。大水。
寛延3（1750）年6月	大水。田畑流失おびたしい。
宝暦4（1754）年5月	大水。
宝暦5（1755）年5～6月	5月13日～6月21日まで長雨。
宝暦10（1760）年5月	大水。
安永5（1776）年5月	享保17（1732）年時より1尺高い水位。
天明8（1788）年6月	隈・豆田両町大水。竹田河原の材木約1万流失。40年来の洪水。

年月	詳細（被害状況）
寛政3（1791）年	大水。
享和2（1802）年5月	豆田大水。豆田町が川のように水が流れる、長福寺や俵屋藤四郎宅が浸水。
文化2（1805）年4月	14日。大雨、玖珠川・大山川大水。
文政11（1828）年7月	大雨、竹田村の米蔵流失。
天保11（1840）年6月	日田・玖珠大洪水。
嘉永3（1850）年5月	5月。長雨で晴れ間なし。大水。
安政5（1858）年	豆田町水害。
慶応2（1866）年6月	友田・草場・渡里・羽野・用松・財津で大きな被害。花月川に架かる大橋（一新橋）・殿橋（御幸橋）が流失し、台霧築が壊れる。
明治2（1869）年6月	小国・津江で多数の死者、隈川洪水。
明治18（1885）年6月	大洪水。
明治22（1889）年7月	大雨。6月16日から20日間雨。死者22名、建物流失324戸、橋破損137本。
明治33（1900）年7月	5日大雨。豆田・隈で死者2名。19日大水。死者8名、三芳の民家2棟流失。
大正10（1921）年	隈町大水。
昭和28（1953）年6月	25日～29日に豪雨。降水量702.9mm。三隈川が氾濫、市街地が浸水。

【表 1-4 日田市の主な火災記録】

年月日	詳細（火元・被害等）
元禄6（1693）年6月22日	隈町高倉吉兵衛方から出火。家150軒焼失、原因は雷。
元禄12（1699）年2月25日	隈町大火。川原町正兵衛方から出火。川原町・紺屋町・中町。
宝永7（1710）年12月6日	我有木喜三郎方から出火。隈町・上横町・紺屋町・中町。
正徳2（1712）年12月3日	吉兵衛向馬屋から出火。紺屋町・我有木町。
享保11（1726）年3月14日	室町東の浦出火。
享保14（1729）年7月1日	中城町出火。家30軒焼失。
享保15（1730）年2月12日	隈川原町出火。家42軒焼失。
享保15（1730）年10月19日	隈裏川原火事。
享保15（1730）年11月26日	浄法寺の下で火事、10軒焼失。
宝暦4（1757）年5月3日	鶴河内村出火。庄屋ほか10軒、小屋20軒焼失。
宝暦7（1757）年10月20日	今泉出火。家14軒、小屋11軒焼失。
明和9（1772）年7月20日	豆田町大火。丸屋幸右衛門方から出火。
明和9（1772）年冬	豆田中城町。
安永7（1778）年4月26日	隈町大火。隈から上竹田まで320軒焼失。照蓮寺、浄満寺、西教寺焼失。

年月日	詳細（火元・被害等）
寛政8（1796）年2月20日	中町から出火。被害は少ない。
文化12（1815）年10月7日	隈町大火。田中町舟守徳三郎方から出火。横町・田中町・我有木町・竹田村残らず焼失。照蓮寺で17人焼死。 ※代官所や各町有志から金銀4貫500目、銭565貫文供出。鍋屋（森家）は被災各戸に5升または3升の米を配布。
文政2（1819）年12月13日	竹田村裏川原出火。
文政5（1822）年2月28日	隈町大火。田中町裏屋敷出火。
明治11（1878）年1月23日	隈町大火。紺屋町風呂屋から出火。138軒焼失。
明治13（1880）年	豆田町大火。60軒焼失。
明治20（1887）年	豆田町大火。20軒焼失。
明治39（1906）年4月3日	隈町出火。田中町大焼。